

明治初期の歌論

小島, 吉雄

<https://doi.org/10.15017/2557151>

出版情報 : 文學研究. 1, pp.239-260, 1932-03-10. 九州文學會
バージョン :
権利関係 :

明治初期の歌論

小島吉雄

明治の初めは、動搖混亂の時代である。和歌に對する論議も甚だ振はない。和歌論の盛んになり出したのは明治十年以後の事である。

明治十一年十一月に開化新題歌集第一編が大久保忠保の編纂で出版せられた。汽車汽船電信などといふ當時の開化の新事物を題にして詠んだ歌を輯めたのである。之れに倣つて佐々木弘綱の明治開化和歌集が明治十三年に出版せられた。弘綱は、また十四年七月に斯ういふ開化新題を歌はむとする初学者のためにその作歌辭典として開化新題和歌梯を編んだ。これは富士谷御杖の和歌梯の體裁をまねたのである。徳川時代に行はれた布留の山ぶみとか和歌梯或は紐鏡とかの類を改竄瀟刻した初學入門書か、でなければ鱧玉集などに倣つて編纂せられた詰らない撰歌集ばかりであつた當時の出版歌書の中に、今あげたやうな異色ある歌書を發見することは、われわれには大きな興味である。開化新題和歌梯の序文には、

歌は見るもの、きくものにつけていひいだせるなりと紀朝臣の書出られたる是則歌の根元なり。されば今文明開化の世となりて西洋各國にまじはり、文物ともに大にひらけて、ちかき比までは夢にだにかけざりし鐵橋をわたり、ゆくての電信機を見て奇しく妙なるたくみを感じ、講官の説教をきいて我國の尊きを仰ぐ、瀛車瀛船の出入の聞なれぬ音をきけば、いづれか歌をよまざりける。さるを昔よりいひなれたる題をのみよみて新題をよむはやうなき事にもおもふめる人は、いはゆる不開化なるべし。

とある。蓋し、文明開化の現代には文明開化をよんだ歌があつて然るべきだといふ主張である。もつとも、此の主張には歌風改革の意志を含まなかつたから、その結果は題意の皮相な説明にすぎない歌をつくつて満足することになつてしまつたが、かくの如き主張の生れて來たといふことは、保守的な歌人の世界にも新時代の波が強く押し寄せて來たことを物語るものであり、和歌の世界も新時代には無關心でゐられなくなつて來た前兆と考へられる。(註、開化新題歌集の序文にも、同様の趣旨が語られてゐる。)

果して、時代は動いて來た。明治十五年七月に、井上巽軒、外山、山、矢田部尙今の新體詩抄があらはれた。新體詩抄は從來の和歌を否定して新體の詩形を起さむとするものである。従つて之れは、明かに和歌への挑戦であつた。新體詩抄の序文によれば、新體詩抄は二つの點から和歌を非難してゐる。即ち、第一は從來の短歌は雄大にして複雑な新日本の思想感情を盛るに適せずといふこと、第二

は短歌は日常口語を俗なりとして排斥し専ら古語を尊ぶが故に思想感情のデリケートな表現が不可能であるといふこと、此の二つの故に、短歌の詩形をすてて西洋の詩などのやうな自由な、字數に拘泥せぬ新形式をとり、平常語を自由に驅使した詩をつくらうではないかと主張する。その説は甚だ雜駁ではあるが當代和歌に對する反抗の第一聲であつた。

さて、之れに刺戟せられて和歌に對する批判が各方面に起つた。おもふに、新しい時代に目覺め新しい思想感情に生きたる新人たちの好尚は、もつと新しい時代の空氣を傳へた歌、新しい時代の情緒を歌つた歌を望んでゐる。然るに、當代の和歌は少しも新時代の思想感情に觸れるところがない。従つて、當代の和歌には不満足である。當代の和歌を攻撃せざるを得ない。ところで、此の當時の和歌に不満足の意を示し、これを攻撃するものに二種類があつた。一つは、和歌の形式が新しい時代の複雑な思想感情を盛るに全然適しないと考へる人々であつた。さういふ人々は和歌の形式をすて、新しい詩形を樹立しようと努力した。他の一つは、和歌の形式になほ愛着を感じずる國粹主義者である。此の人々は、和歌を改革して新しい時代に適するものたらしめようとした。明治十八九年頃から二十五年頃にわたつては、これらの議論が交々歌壇を賑はしたのである。

先づ、和歌輕蔑論者から述べてみると、明治十八年十月に出版せられた湯淺吉郎の「十二の石塚」の序文に、植村正久が、その道義的立場から和歌の花鳥風月の趣味を難じ、その纖弱なる歌調を斥

け、和歌改良の如き姑息な手段を棄てて和漢泰西の詩の長所をとつて一家新創の詩體を成すべきことを説いてゐる。尤も、花鳥風月の歌や戀愛の歌や哀傷の歌などを以て「社會の困厄をうれへ、人類の苦禍を哀しみ、私を排し公を翼襄して人心を救ふ」を歌つた詩よりも下等のものであるとなす點に於て、大きな謬りに陥つてゐるやうだが、和歌が單に風人騷客の玩具となり、妄りに古雅を貴び民俗を蔑視し詩歌をして特に社會の一小局部に行はしめたるの弊をついてゐる點、並に和歌は兎角氣魄の足らざるうらみあるを指摘してゐる點は、注目せられなければならない。

次いで明治二十一年八月國民の友第二十八號卷頭論說「新日本の詩人」に於て、徳富蘇峯は「詩人の職分は上帝と人と萬有とを一貫したる宇宙の美妙を探り、此の美妙を吸収してこれを人類に分配するにある。然るに、和歌の美は小さく薄く軽く、未だ之れを以て宇宙の美を示現するに足らぬ。従つて宇宙の美妙を啓示し、人生の批評を職分とする詩人が、その思想を表現しようとする時、短歌はそれに適するものでない」といふ意味の事を論じた。かゝる思想傾向は當時の識者の間に可成り多くの支持者をもつてゐたと見るべきである。明治二十三年國民の友第九十六號より百七號にわたつて連載せられた山田美妙齋の日本韻文論にも、短小の詩形たるが故に和歌を侮蔑すべきではないが、その餘情主義にたたられて宇宙の哲理を開明し壯大の思想を歌ふ事の出来なかつたことは、詩としての價値すくなきものであると説いてゐる。但し、しがらみ草紙第二十五號に森鷗外は、美妙齋の此の韻文論

を評して、抒情詩の本性を明快に説明し、大思想を説くのが必ずしもその本分でない所以を論じた。

此の外、此の前後には、明治二十一年國民の友第三十號、三十一號、三十五號にわたつて、森田思軒の「和歌を論ず」の文出で、二十三年しがらみ草紙第一卷第六號に太田好則の「日本詩人の二大弊」市村瓊次郎の「今世の詩人に望む」同じく二十三年國民の友第七十二號に高橋五郎の「千代田歌集の批評」等、専門外の人で當時の和歌を批判した文が盛んにあらはれた。之れ等の論は一つには從來存在する和歌への嚴正批判を行ひ、その得失を闡明するに効果のあつた點に於て、二つには和歌改革運動を興起させる重大な契機をつくつた點に於て、短歌史的に充分意義あるを思ふのである。だが、上述の諸論に、新しい和歌の建設を期待することは出来ない。革新運動に直接寄與するものは、和歌に愛着する改良論者の所論である。

改良論の代表的なものは萩野由之の論である。明治二十年三月東洋學會雜誌第四號に「小言」と題してその改良論が掲載せられた。この論文は少し修正せられて、その年の七月、小中村義象の古典學革弊論と一緒に國學和歌改良論なる名で出版せられた。論旨に大差はない。由之の議論は古典學者としての立場から見たるものであつて、その論の根本に、和歌は世道人心を補益し誘導し、且つ歴代の時代精神を知らしむるよすがともなるものであるべきであるといふ思想が盤踞して居る。即ち、その冒頭に歌の流弊を論じて、歌は政治上にも學問上にも大厄をもたらすものなることを主張し、延喜以來

修史の事滅んで和歌勅撰の事起り、政治はために紊れたることを説き、また國學者がその古典研究の方便たる詠歌にのみ専心してその本を忘れたるが故に古典學の進歩が阻害せられたと歎いた。だが、かういふ流弊があるに拘らず、歌はよくその時代時代を表現するものであるから、詩經を讀んで多く鳥獸草木の名を知り、法馬ホウマの詩を讀めば古代の歴史を知るといふやうに我々を益することも多い。これは、心の感動を起さしむる事物と感して外に發する詞とは時世に連れて異なる故である。だから、今の事物によつて感動した情は今の詞で述ぶべき道理であり、此の道理を推考へて陋習を破り新面目を開くことに勤むべきで、さすれば歌も有用のものとなる——そこで彼は、和歌は古人の糟粕をすてて改良せられなければならない、といふのである。然らば、それは、どういふ風に改良せられるべきであるか。彼は、これを五つの項目に分つて説いた。

第一に歌題である。歌は題詠になつてから下落した。歌は原則上實境に對して實情を詠むべきものである。然しながら初めは題詠から入るのも一の方便である。ただ、その題は出來るだけ現實に耳目によるゝ事物から採るやうにしたいものだ。譬へば、上野公園の遊覽、不忍池の競馬、隅田川の競漕會の類のやうなものをいふのである。

第二は歌格である。歌格は自由であるべき筈だ。即ち萬葉以上には長歌多きに古今以下は短歌の十が一にも足らぬ。しかし、人の心のはたらきは千變萬化するものだから、いつも三十一字にて賄はる

べきでない、其の意境に應じて長歌とも短歌ともなすべきである。また句は必ずしも五七五七に限るべきでない。上古の歌に長短等しくない句あるは却て天真を見ることがある。歌格の事は最も思慮すべきである。

第三には歌調である。歌調は快活勇壯なものでなければならぬ。物のあはれを詠歌の主體にするとは歌調を弱々しくし、惹いては日本國民が古來尙武の氣象も次第に消滅して所謂東海姫氏國手弱き女子の殖民地とならうとするだらう。

第四は歌材である。實情を離れた虚偽の歌材はこれを排斥する。蓋し、歌の主とする感情は誠ならでは起るべきでないからである。且つ、誠に情景を寫すときは歴史の緯ともなりて、とりどりに妙である。

第五は用語である。用語は自由なるべし。物の名は電信にもあれ、汽船にもあれ、字音で呼んでゐるものは其儘に詠み入るべきことである。洋語なるも亦然り。用語に雅俗はない、ただ運用の巧拙によるのである。

以上が改良論の骨子である。此の改良論に對して、東洋學會雜誌第二編第三號に服部元彦の「和歌改良論を讀む」が出で、續いて大阪の武津八千穂といふ人が和歌改良不可論(二十年十二月)といふのを草した。明治二十二年十二月の東洋學會雜誌に於て、萩野由之は、此の改良不可論に答へて、更に

和歌及び新體詩を論じた。由之が曩に改良論を草してから二年の歳月が流れてゐる。その間に、東洋學會雜誌には、三上參次の「歌の論」が出で、高津鉦三郎の「詩歌ヲ論ズ」の文があらはれた。共に西歐の形式詩學から得た智識をもととして一般詩歌の本質を論じたものである。就中、三上參次の「歌の論」には「我國には叙史の歌なく叙事の歌なく寓意の歌なく又戯曲の歌もない。これからは大いにかういふ歌を起さねばならぬが、それには、先づ其歌の材料と用語とに注意すべきである。歌の形式たる歌格は自由であり材料は所は天地四方に求め時は三世に涉るべく従つてまた饒多である。用語は今人今日の言語即現代語を用ゐて雅趣がなければならぬ。雅趣は雅語を必要とする。雅語とは王朝の頃の言語ではない。今日の雅語である。主として今日の言語を用ゐる尙往古の長所を擇んでこそ卓識ある歌人といふべきである」といふことが述べられてゐる。

萩野由之の「和歌及び新體詩を論ず」には、之れ等の人々の説が大きな影響を與へてゐる。譬へば、狂痴の論などは全く三上參次の所論から出たものである。

「和歌及び新體詩を論ず」は、和歌の弊五つ、新體詩の弊七つを擧げ、共に改良せらるべき必要を力説し、新體詩家は新體創始の卓見と洋詩の粹を抜く力量とを有してをり、和歌者流は語法に熟し字句をねり品格を重んじ狂痴をすてない慣習をもつてゐるのだから、將來の國歌は此の兩者が互にその長を長とし短をすてゝ一緒になつて進んで行くべきであらうと結んでゐる。詩歌改良に對する彼の意志

が那邊にあつたかを知る一つの鍵として、彼のいふ和歌新體詩の弊なるものを舉げてみると、次のやうなものである。和歌の缺點は、一、意匠が狭小であること。意匠とは今日いふところの構想のことでもあらうか。二、材料を局限してゐること。材料とは詠歌の對象である。材料を限るとは、花鳥風月をのみ歌つてゐるのを指したのである。三、言語を古くしてゐること。これは用語に制限あり、甚だ不自由なのを非難したのである。四、氣力に乏しいこと。これは、猶ほ歌に氣魄と生氣との缺けてゐることを言つたものゝやうである。五、體裁の變化に乏しい。體裁とは、詩歌の外形、たとへば長歌形式とか今様形式とかをいふのである。論者は此の詩の外形はその内容に伴つて大小様々があつていいといふ意見である。更に、新體詩の短所はといふと、一、詩歌は高尚なるべきに新體詩は詞を擇ばず、蕪穢讀むに堪へぬ。二、語法を正さぬ故、意味のおぼつかなきところがある。三、句法を濫り四、鍛鍊を缺き 五、精采あるところなく 六、狂痴の處がなく 七、品格が低い。但し、狂痴とは沒我的感情である。狂騰した感情のリズムが作品中にあらはれてゐべきをいふのである。

かくて、此の萩野由之の改良論の前後より和歌の論いよいよ盛んに、中には過去の歌人の再検討を行ひ、また自らその作品に新様を示さんと試みるものが出て來たのであるが、その中で、特に著しいものは、池袋清風、井上通泰、中邨秋香、大和田建樹、落合直文などである。勿論、みな改良論者である。

落合直文には、別にまとまつた歌論書がないが、彼の思想は、明治二十四年十一月に出版せられた新撰歌典、明治三十七年に出た萩の家遺稿等から斷片的に拾ふことが出来る。明治三十二年十一月の國風家懇親會席上での演説（心の華明治三十三年一月號所掲）三十三年七月大阪毎日新聞紙上の談話筆記、及び三十四年三月出版の名家苦心談等も亦彼の歌談としては纏つたものであるが、三者とも、彼の當時の歌壇に對する見解を述べたものであつて、舊派和歌と新派和歌との調和を計つて和歌の進歩に貢献したいと云ふ意志を洩してをり、凡そわたくしの今、聽かむと欲してゐるものとは縁遠い議論なのである。直文も亦和歌改良に志してゐたのであるが、その意見は、萩野由之の改良意見を大體に於て肯定し、更に一層文學的立場からこれを純化して自らそれを作品の上に體現せむとしたものの如くである。由之の意見は、和歌は短歌の一體に限るべからずとし、題詠は弊害あれば原則として不可なるも初學者には題詠より入るを可とするものであつたが、新撰歌典には、また同様の意見が語られてゐる。遺稿中の萩の家漫録に、

某、いづこより寄せくる歌も、大概、古人の口まねにて更におもしろからず。こは、題を出して、よましむるがためならむといふ。余、まことに然り。されど、初學の者に對しては、題を設けて、あらかじめ、その範圍を定むるも、また、必要ならむ。ただ古き題にては、類題の歌集をよみ、その意をとり、その詞をぬすみて、われといふことを、忘るゝおそれあり。故に、余は、題はいだせ

ども、新しき題のみにて、古き題をいささず。その新しき題も、ただ、その大體の目的を、示すのみにて、その精しき方面のことをば、勝手氣儘にえらばしむるなり。

と言つて、彼の新しき題なるものを示してゐるが、たとへば「車の上に羽子飛ぶ」「庭の芍薬赤き芽をいさす」など、由之のあげた「隅田川の競漕會」などいふ題よりも一段の進歩である。同じく遺稿中、「學弟與謝野鐵幹に與ふる文」には、彼は雄壯の歌を獎勵してゐる。これも亦由之が改良論に力説したところであつた。しかしながら、直文の此の文中には雄壯と共に優美をも尊んでゐる。雄壯にして優美、これが直文の喜んだ歌であつたのではなかつたらうか。直文の歌論で、最も注目すべきは、前掲「萩の家漫録」の文中にも見える通り、「おのれを忘るるな」といふ言葉である。「おのれを忘るるな」といふことは換言すれば自我の主張であり、個性の尊重である。直文の門下生であつた與謝野鐵幹も金子薫園も、その歌話の中に、師の言葉として屢此の事を語つてゐる。此の思想は未だ由之も誰れも明確に語らなかつたところである。而して、此の點を力説したといふことが、直文をして卓拔な歌人たらしめ、同時に和歌革新運動の木鐸たる地位にをらしめたのではなからうかと考へられる。

直文の他に、中邨秋香、大和田建樹なども由之と同類の改良論者に入るべきである。秋香には新説歌がたり、建樹には作歌自在の著がある。佐々木信綱には、明治二十一年二月女學雜誌に詠歌論を發表して其の和歌に對する新見解を明示した由であるが、不幸にしてわたくしは未だそれを見てゐない

ので、當時の彼の意見を紹介し得ぬ。けれども、彼が後年その作品の上で示した態度から考へるに彼も大體は由之の改良論の支持者であつたと想像して大過ないだらう。

さて、當時、改良論者のうち、異色のあつたのは、池袋清風であつた。清風は明治二十一年の初めに東京日日新聞に和歌概論を書き、續いて郵便報知新聞に和歌沿革略史を書いた。和歌概論の方は大體和歌の本質論と和歌振興策とを述べたもので、和歌略史の方は歴史的考察によつて概論にのべた自説を更に敷衍しようとしたものである。前者に於ける彼の歌論の根本は、詩歌は幽妙高雅の感情を含むべきであり、鄙俗ならざる用語と宜しき句調とはその情を助くるものであるといふことにある。而して、さういふ高雅の感情を専らとするが故に、和歌は肉慾錢儲の情を斥け天然の風景清雅の情を旨として詠ずるものであり、和歌の功德は學課多忙の書生と雖、天然の雅味を識つて之れを喜ぶに至るにある。且つ、和歌は感情を旨とするが故に理論を嫌ふ、また人の感情は萬人の起すところのものであるから、従つて詠歌は分業的専門的性質のものではないと述べ、更に當今の和歌の振はざる所以に言及して、五つの理由をあげた。第一に文章と歌とその用語を異にすること、第二は和歌は隱居老人若くは世に不用な人の翫弄物であると世間一般が思做してゐること、第三は、和歌は困難なもの、古代語に習熟しなければ詠めないものとの考へが世間に廣まつてゐること、第四は、歌をつくるのは何か特殊な技巧が要るものであつて、平生の談話と異なる發想をしなければならぬものの如く世人に考へ

誤まられてゐること、第五に和歌の吟調の宜しきを得ないこと、即ち是れである。彼は此の五つの理由を克服し、世人の蒙を啓いて和歌の振興を期すべきであるといふ。ところで、第五の吟調といふのは聲を出して歌を朗吟することだが、聞いてゐて面白く氣持よく感ぜられるものならば、今まで歌に何の興味も感じなかつたものも興味をおぼえて作つてみようといふ氣持になるであらう。だから、さういふ愉快な氣分を與へる吟調も和歌振興の一策だといふのである。後者、和歌略史では、歌の歴史を概説して、古今集を和歌の中庸であり、標準であると言つて之れを最も推賞し、更に近世歌人中に於て、香川景樹を賞美して和歌を既倒にかへした人であり實に偉大な歌人であるとなし、その門流またすぐれたる歌人多く和歌の本街道は此の門流にあると論じてゐる。次に現代の歌界に論及し、當今の詠歌者には數種あつて、第一、開進黨の發達したもの（註、開進黨とは徳川時代に舊弊を脱して新風を開進せんとせし一派をいふ）第二、そのよく發達せざるもの、第三萬葉體を學ぶ者、第四、開進黨人の門人にして迷ひたるもの、第五、郷邑間にあつて鄙俗語を用ふる自己流、第六、二條冷泉の純粹なる系統、即ち譯の分らぬ詠をなす者、「此れは新古今時代に歌に病を生じ足利時代には發狂し徳川時代の初には死して葬られ、今日は骨も腐れて土に化したるなり。而して第五第六を兼ねた老盲師の類最も多し」と類別してゐる。第一第二の歌人に就いては言ふほどのことはない、舊弊統の歌に至つては度し難い。而も此の連中がそれぞれ門人を擁して一廉の宗匠を以て任じて頑迷困陋自らの非を

さとりざるに至つては、いよいよ度し難い。歌は天然自然のまことに従つて詠すべきものである。矯飾は嫌ふべく、理屈は避くべく、類題和歌集のつづりあはせでは歌にならない。天真のままに平穩の調を以て歌は詠せらるべきである。畢竟、彼は景樹の歌論に立脚し、八田知紀の流れを汲んで、歌は自然に天真の流露するまゝにおとなしい歌調でよむべしといふ事をモットーとして、その見解のもとに古往今來の和歌を論評したのである。なほ清風は、用語を擴大して瀛車瀛船の如きはその音のまゝ歌に用ふべしとなし（正宗敦夫氏の「池袋清風夫人」による）歌は實情實感を詠ずべしと論じてゐる。（明治三十年間の「女學雜誌」の選歌評による）

清風の門下には、大西祝、湯淺半月がゐる。半月には歌論はないが、大西祝には此頃盛んに歌論の文がある。明治二十三年十二月日本評論第十九號に於ける詩歌論一斑、明治二十五年青年文學第九號より第十四號にわたる詩歌論、二十五年國民の友百六十四號より百六十六號にわたる香川景樹翁の歌論、二十六年早稲田文學四十九號及五十號に於ける國詩の形式に就いて等これであるが、その論は、やはり桂園流歌學を基礎としたもので、その哲學的考察を施した點で清風よりは一步進んだ論をなしてゐる。

井上通泰には、まとまつた歌論といふものがない。通泰は、池袋清風と同じく景樹の崇拜者である。彼は景樹の歌を理解するためには景樹の事蹟を先づ明かにしなければならぬといふ考へから、景樹並にその門流の傳記的研究を行つたのである。その收獲が、明治二十二年四月國民の友に出た香川景樹傳であり、同じ年の十月しからみ草紙第一號の小澤芦庵傳、第二號の景樹傳補遺であつた。二十

二年から二十三年にかけて同じくしがらみ草紙に桂園叢話を載せてゐる。彼の當時の歌論をくはしく知る資料に乏しいが、現代短歌全集跋文から推察するに、當時の彼は、歌は題を設けて詠むべきでない、歌は殊更に作るべきものでない、歌にはそれぞれその時代相當の風潮があるべき筈だと考へてゐたやうである。

次に、改良論の最左翼に位する口語歌論について一言しなければならぬ。口語歌論は萩野由之などの、「現代の和歌は現代の事物を現代の詞でいひあらはす」といふ主張を極度に徹底させたものである。明治二十一年四月東洋學會雜誌第二編第五號に林甕臣といふ人が言文一致歌といふのを載せた。その論旨は、

歌ハ、折リニ觸レ事ニ臨ンデ情ノ感ジウゴキ思ヒ切ニセマツタトキノ呻吟ウツメキノコエニ過ギナイモノ
デアル。云ハバ鳥ガ花ニ囀リ虫ガ草ムラニ鳴クモ、ツマリオナジコトデ萬葉集ヤナニカノ古イ歌ノ
中ニ其ノ世ノ俗語方言ノママニ口カラデマカセノヤウナノニカヘツテ感心セラレルノガオホイガ、
ソレヲ見テモヨウワカルコトヂヤ。歌ハ殊ニ言文一致デナケレバナラヌハズデアル。

といふのである。これは一つの思ひつき程度の試みに過ぎなかつた故か、別に組織だつた主張が述べられてゐない。思ふに、散文の方では既に明治十七年に學士會院雜誌にその論見え、續いて物集高見の言文一致論となり、山田美妙、長谷川二葉亭等の實際運動も起り、浮雲などのやうな大部の言文一

致體小説も書かれるやうな時代だったので、それに刺戟されたのと、傍ら萩野由之などの改良論の醸し出した和歌改良機運に動かされたのとで、かういふ提唱が起つたのであらう。もつとも、此の言文一致歌は、海上胤平の嘲笑を買つたのみで一般世間からは顧みられなかつた。林壘臣は江戸の國學者林國雄の孫であつて、日本文典、日本語源の研究等の著述があり、此の口語歌を發表した頃は華族女學校の教員をしてゐた。平田篤胤に入門した國學者である。歌はあちこちに發表してゐた人で、大八洲學會系の歌人であるが、後年明治三十八九年頃、青年世界といふ雜誌の歌壇の撰者をしてゐた時分には大和田建樹の歌風に近似した歌を發表してゐる。この人は、明治三十三年に言文一致會といふものを組織した。此の會は三十三年の三月六日に帝國教育會で發會式を行つたが、その趣旨は言文を一致せしめ、なるべく漢語漢字を減少するにあつたので、岡倉山三郎、藤岡勝二、神田乃武、後藤牧太などに英國公使館のクローホームス、ゴルドン、ファース等までその主唱者のうちに加はつてゐる。また、此の會は明治三十四年七月八日に、言文一致の歌を作ること、言文一致の文範を作ること等八ヶ條の條項を決議してゐる。因に壘臣は大正十一年一月八日七十八歳で歿した。

以上は和歌改良論の大觀である。皆それぞれに主張はあつたが、歌材を廣さに求め、題詠を排斥し、實感を尊重し、用語の自由を欲する事に於て悉く相一致してゐた。殊に、用語問題は彼等の最も力説したところであつた。

此れに對して、當時の既成歌人は、どういふ見解を持たたか。萩野由之の和歌改良論の附録に、高崎正風の歌談が載せられてゐる。その中に、

歌は感情の詞に發するものなり、故に歌は理論に合ふべきにあらず。然るに後世は直に感情をよみ出すにあらずして、歌の爲に思考を費し語格などの議論甚喧しくなれるは、大いなる誤なり、歌は口に唱へて耳に入れるものなれば、主とするところは調子にありて格にあらず

と言つて香川景樹の調への説を稱揚し、

歌調の哀婉柔懦なる弊の改良すべきこと本説に論じたるが如し。かくなれる所以は、佛敎の盛なりしが爲に無常因果の説人心に浸潤し是より萬葉風の活潑の氣は次第に消滅したるものと思はる。

と述べ、また、

感情をそのまま當時の詞にて言ひ出せる故に樵夫山賤まで高妙の歌をよみ出せるなり。今の歌は古人の舌と古人の耳とを借らざれば詠まれず、學者とても善歌なき筈なり。畢竟俗語をよみ入るることを禁じしは歌の一大厄をなしたりといふべし。

といつて、由之の和歌改良論が勇壯活潑の歌調を力説し用語の自由を主張したのに賛意を表してゐる。雑誌「心の華」第一號に載つたその「歌の眼目」なる文では、

第一感情、第二いひあらはし方、第三語句の親和、この三つのもの詠歌の大事なり。詞に雅俗とい

ふ分界たて難し、畢竟、歌の眞否は詞の新舊雅俗には拘らず、唯詞の用ゐる方の適否にあるなり。語句の親和は自然の妙なり。

と論じた。以てその所見の一般を察すべきである。同じ號に、坂正臣も、「歌語の雅俗」と題して、歌の尊さと雅たるとはその心詞のいにしへざまなるがゆゑにあらざ（中略）明治の大御代なり。漢語もよみいるべし、洋語もとりつかふべし。その心だにうつくしき歌ならむには、何かあらむ。かやうにしたてたる歌を見れば直に狂歌なりといふ人もよにあるめるは、なにのしれものにかとをか
し。

と、大膽に論斷してゐる。明かに改良論への賛意である。これに反して、皇典講究所講演第百號に於ける木村正辭の「詠歌論」は、和歌改良論に反對して次の如く述べてゐる。

最近歌調を變化せむとする輩の説に曰く、「すべてものは世と共に移り變るが常なればひとり歌のみ古を慕ひて古人の口まねをせむとするは愚なり、當今さゝなれぬ詞などをならべたて、僅に同輩同士の翫びものとするは遺憾なり、一般の人にもよくわかりて聞きとれる様に今世の俗語または西洋語などをも交へて詠ならふべし。若し然らずしてこれまでの調を以て人々に詠み出るものとするときは古人の歌なるか今人の歌なるか辨へがたきもの出で來べし」といへり。これは一理あること
のやうなれども、古言または中古の詞を以て作りたりとて歌には一種特別なる時代の調子といふも

のありていかに古言を並べてつくれるも其時代々々の調は一吟して明に知らるゝものなれば、古言
又は中古の詞をもつゞりたりとて古人の歌とまざるゝことはなき也

そして、「歌の調は決して議論で風化せられるものでない、歌の調子を一變するは學問上から論じた
のではとても出来ぬ、これを風化するは世間に絶倫の歌の上手があつて人々自らこれに感じて自然と
それに化せられるのである。」といひ、「歌の俳句に比して分りやすいのは、詞の使用の法則あるとその
用ゐた詞の正しいのによるのである。萬葉にも字音語佛語なども用ゐてゐるから、現代も名詞は字
音語又は西洋語をそのままよみ入れても妨げない」とも述べてゐる。すべて、冷嚴なる學者の態度で
ある。詠歌には歌學の研究が第一だといふ考へである。先例古格に違ふものは皆邪道であるといふ考
へである。その思想の最も濃厚に出てゐるものは、皇典講究所講演第百二十五に於ける本居豊穎の歌
談である。改良論は、言はゞかういふ頑迷な保守主義者への反抗だつたのだから、此の人達が改良論
に好意を寄せなかつたのも當然といふべきであらう。凡そ、正風等の桂園派は詠歌第一主義であつ
た。正辭、豊穎等の國學者出の歌人は歌學第一主義だつた。此の頃歌論の方面に活躍した海上胤平一
派も亦その歌論に關する限りでは、此の國學者出の歌人と同一範疇に入れらるべきものである。

海上翁の著書では、明治十七年十一月出版の東京大家十四家集評論を最初とし、歌學會歌範評論、
(明治二十六年)八田知紀歌集評論(明治三十七年)長歌改良論辯駁(明治二十一年)新自讚歌評論

(明治三十六年)等である。彼の歌學の根本は賀茂真淵の真心と益荒夫ぶりの萬葉調禮讚とに據を求めてゐるのであるが、その所説は一々の歌について、古格古例にてらしてその用語措辭を批難し語格の正否を論ずるにある。その系統を引く三栗廼屋主人春日敬三、平塚義平等の所論も要するに同様のものである。また、此の胤平と論戰を交はした鈴木弘恭、魚住長胤等の所論もまた同様の問題について堂々廻りしてゐるに過ぎない。されば、胤平等も和歌改良家の意見を白眼視し、やがて興れる新派和歌に正面から反對することにもなつたのである。

之れを要するに既成歌人のうち桂園派歌人は改良論に同情を寄せ、國學者系の大八洲學會派歌人は改良論に反對を示したのである。

おもへば、改良論者のうち、清風、通泰の徒は明かに桂園の流れを汲むものである。最も進歩的な意見を持った由之、直文の徒といへども、その新撰歌典には、「歌はむつかしきものにあらず、思ふまゝをよめ」と景樹派の所説を引用し、その保守趣味の打破といひ實感の尊重といふとも、かの題詠論に於てなほ題詠を徹底的に排斥し得ざりしが如く、或は直文の萩家漫録中に見ゆる歌題「舟の上にて、女、芹を洗ふ」「梅のうつぼに、雪、また残れり」を見ても明かな如く、傳統的な一種の雅情を歌に要求し、桂園の既に開拓せる景趣の世界にその美を尋ねてゐたのである。また用語の自由を望むにしても、三上參次の歌の論に述べられてゐたやうに、用語に雅俗の制限を置いて、用語は雅ならざる

べからずと考へてゐたものゝやうである。雅情をそこなはざれば平語俗語もこれを用うべしとは既に景樹の庶幾するところであつた。即ち、總じて明治二十年臺の和歌改良論者は甚だ桂園派的色彩を帯びてゐたといふことが言へると思ふのである。

色々の改良論のうち、萩野由之系統の和歌改良思想は、落合直文を通じて、更にその門下によつて大いに發展せしめられた。

明治二十七年春、與謝野鉄幹が二六新報に掲載した亡國の音は、平弱な歌調、狭小な思想に踞するを喜ばず、自由にして新鮮、格調高く氣概ある大丈夫の歌を力説したものであるが、歌に氣力を望むは由之の改良論中に歌調の快活勇壯を望んだ意志を受けつぐものであつて、かねて直文の要求した雄壯なる歌への志を宣揚したものである。彼は進んでその志を實際作品の上に意企し、所謂男兒の歌を高唱するに至つてゐる。

また、由之が、希望した新躰詩と和歌との調和も鉄幹に於て實行せられた。和歌の諸形躰の發展を願つた事は、此の派改良論者の一つの特色であつて、直文の如きも盛んに色々の形躰を試みたが、鉄幹は更に積極的態度を以て新躰詩に和歌に様々な試みを試みると共に、短歌を短詩と呼んでこれを詩の一形式と見做し、本質的に新躰詩と異種のものでないことを明かにし、新躰詩に於ける手法思想を短歌の方に及ぼすことに成功したのであつた。

鉄幹は、また、その詩歌集「東西南北」の序文に、

小生の詩は短歌にもせよ、新体詩にもせよ、誰を崇拜するにもあらず、誰の糟粕を嘗むるにもあらず、言はゞ、小生の詩は小生の詩に御座候

と、記した。これは直文の鼓吹した自我の主張を明白に表明したものである。それが更に發展して、

明治三十二年九月雜誌國文學に於ける「あゝ今の詩人の自家を忘じたるや久しいかな」の語となる。

此の事は、獨り鉄幹のみに言はるゝ事ではなく、直文門下のすべてが有つてゐた思想と見るべく、同じ國文學第十二號に於ても、服部躬治が「現今の歌人」と題して、「自己を離れて歌の存在すべからざるを説いた。更に、同じく服部躬治が説いた、自主心の堅固と自由の觀念とは（心の華第三卷第二號）歌について所感を述べ」畢竟するに、落合直文歌學の要諦であり、同時にそれは、萩野由之歌論の正統なる發展だつたのである。

わたくしは、以上明治初期の歌論を和歌改良論を中心にして匆卒として語つた。なほ、語り洩した點もあるやうな気がするが、本論の要旨は、明治初期の歌論が、明治新派和歌運動に如何なる關係をもつたかの一斑を暗示しようと思つた點にある。行文蕪雜、論旨の汲みとられ難さのあるを懼れてゐる。因に林甕臣の口語歌論は後進にこれといふ影響を與へてゐない。次期の口語歌運動は此れとは別種のものである。